

## 第 2 回世界農業遺産実務者フォーラム

### レポート

総合地球環境学研究所  
研究基盤国際センター コミュニケーション部門

開催日時：2019 年 11 月 18 日（月） 14 時 30 分～18 時 15 分

場所：総合地球環境学研究所 講演室

参加者：自治体関係者 16 名（8 県 11 地域）

GIAHS 関連組織関係者 2 名

教育関係者 2 名

研究者 8 名

オブザーバー 4 名

開催趣旨：世界農業遺産（GIAHS）に関して行っている取り組みや具体的な課題を共有し、その活用・推進にプラスになる手法やアイデアを生み出す場をつくることを目的としたフォーラム。そのために世界農業遺産に現在関わっている実務者の方々をお招きし、単独の地域で対応するには難しい課題に対応し、新たな価値を創造するネットワークの構築を目指している。

プログラム：14:30 挨拶 総合地球環境学研究所・所長 安成哲三

14:35 趣旨説明 総合地球環境学研究所・教授 阿部健一

14:45 GIAHS 設立者からのごあいさつ

世界農業遺産基金 パルビス・クーハフカン氏

15:00 話題提供「GIAHS を教育に」 草津市立渋川小学校教諭 中村大輔氏

15:45 コメント 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校教諭 上水陽一氏

16:00 休憩

16:15 フラッシュプレゼンテーション

17:30 質疑応答

18:15 終了

18:30 意見交換会

## 話題提供「GIAHS をどう教育に活かすか」

滋賀県草津市立渋川小学校 教諭 中村大輔氏

### 学習に GIAHS を取り入れる

今日は貴重な機会をいただきありがとうございます。

今日は本校の取り組みについて発表させていただきたいと思います。

本校では環境教育を中心に、GIAHS を目指している魅力ある滋賀の農業を勉強しています。まず、3枚の画像をお見せします。

1枚目は、パルビスさんと阿部先生が学校に来てくださったときのものです。本校がGIAHSを活かした学習を始めたのは、この訪問がきっかけでした。その際いただいたパルビスさんのお話が、郷土料理の学習というのは、つまり地域の農業や漁業を知ることであり、大切なのは琵琶湖の漁業や農業を学習につなげていくことだという内容でした。

2枚目はICTを取り入れた遠隔授業の第1回目の写真です。大分県の林会長が写っておられます。クヌギ林の中でお話をしてくださった様子です。このときは私が現地に取材に行き、教室とつなげて授業を行いました。さまざまな地域と教室をつなげることで、県外の地域のことを子供たちは知ることができます。

3枚目は、一番最近の遠隔授業の様子です。本日ここにいらっしゃる日之影町の飯干さん、宮崎県庁の担当の方には当時学校に来ていただいて、教室でお話をいただきました。遠隔授業では五ヶ瀬町のお茶農家さん、日之影町の米農家さんをつなげました。こうして子供たちがそれぞれの地域の良さを感じる、つながりを大事にする授業を行っています。

実はもう1枚写真があります。これは、日本農業遺産認定が決定したときの、知事をはじめとする皆さんの様子です。GIAHSは変えていく遺産、次世代が大切ということで、ここに本校の生徒が2名参加しておりました。滋賀県ではこういう場所に小学生も加わり、一緒になって取り組んでいます。

### 環境教育の3つの理念

本校での環境教育では、大事にしていることが3点あります。まず1つめは、さまざまなことを自分事ととらえ、そのために考え、人の役に立ったという自己有用感を育むこと。2つめは人と人とをつないでいくこと。そして3つめは、郷土への愛着や誇りをもたせることです。この3つを達成するために、学習の中でGIAHSを活用しています。もともと本校では総合的学習の時間に郷土料理学習を行ってきました。実は、食を扱う授業は、その実施が非常に難しいのです。食材や調理法など、しぼりが多いからです。そのため本校でも、これまでの環境教育は琵琶湖の水質をテーマにしてきました。「食」ではなかったのです。しかし、いくら琵琶湖のゴミ問題や水質を学習しても、子供たちが琵琶湖に対する愛着をもつまでには、なかなかたどり着きませんでした。ただ、お年寄りからお話を聞くと、琵琶

琵琶湖の魚や貝を食べることで琵琶湖への愛着が湧いたのだとおっしゃいます。そこでやはり本稿では郷土料理学習を設定したわけです。その際、小学生の郷土料理に対する意識についてのアンケートを実施いたしました。県内の70校5,000人を対象にしたものです。郷土料理に関する関心や経験、日頃の食生活について質問する内容です。そこで分かったことは、滋賀県は琵琶湖の魚を使った郷土料理をPRしていますが、子供はあまり知らないということです。このままでは、琵琶湖の環境がよくなり、魚がたくさん獲れたとしても、郷土料理を食べようとは思わないし、その文化は残っていかないでしょう。郷土料理を未来に伝えていくためには、まず知ることが大切だと考えました。そのために学校給食は非常に有効です。しかし、食べる時には郷土料理についてのきちんとした説明がないと、あまり効果はみられません。たとえば、滋賀県の小学5年生は学習船に乗って一泊二日で臨海学習を行います。そこで琵琶湖の魚の郷土料理を食べるのですが、きちんとした説明がないために子供の記憶には残りませんでした。郷土料理を食べた子、そしてそれを意識している子は、その価値を感じることができています。こういう状況を把握し、郷土料理の学習に活かすことにしました。特に環境学習では、子どもたちが何かを気づき、考え、行動するというプロセスを大事にしています。郷土料理の価値を知り、それを伝えるために行動するということです。そのために子供たちは実際に郷土料理を作って美味しいと思う体験をさせます。そしてそれを誰かに伝えるために考え、行動するのです。郷土料理の価値については県外の方々からもICTで学ぶのですが、そこでは逆に自分たちの地域のことを伝えることもさせています。また「伝える」ということについては、滋賀の郷土料理博物館を作ったり、地域で郷土料理の試食会を開催するなどして実行しています。実は、子供達はこうした「行動すること」に非常に満足感を持っています。子供たちの理解度や満足度を調査してみると、確かに、料理を作って食べてみたときはとても楽しそうにしているのですが、実は美味しい料理を作ったり食べたりすること以上に、博物館などを作って誰かに伝える方が満足していることが分かりました。作り、考え、伝えるという一連のプロセスに満足していることが、数値上ですが分かっています。小学生でも出来る「行動化」までつなげることが大事だということです。

## 郷土料理博物館

ここで彼らが郷土料理博物館で使っているスライドを少しご紹介します。草津市は50年前までは自然豊かな農業中心の町で、150戸の農家がありました。今では人口が増え、都市化が進んでいます。渋川小学校の校区だけでも4000戸、人口1万人となり、子供たちの多くはマンション住まいです。学区内の田んぼは1枚しかなくなり、子どもたちは土を歩くこともなく、また地域の歴史などを知っている大人も少なくなっています。この学区の子供たちにどうやったら地域愛を持たせることができるのかが課題で、農業へ目を向けるなんて考えられませんでした。そんな中で、本校の環境学習の基本的な目的は、人と人とのつながりを作っていくこと、滋賀県や草津のことを知ってもらうことであり、これま

でたくさんの人との出会いを大切に、食文化を学んできたわけです。たとえば漁師さんに魚をもってきていただいてお話をさせていただき、農家さんには野菜をもってきていただいてお話をしてもらいます。そのほかにも和菓子職人、企業の方、研究者の方、たくさんの方にきていただいて学習を進めてきました。そして子供たちは滋賀の食文化を学び、それを守りたいと思うようになりました。自分たちでも料理して作り、食べ、それをお父さんやお母さん、たくさんの人に伝えたいと思うようになりました。そのような取り組みのなかで、この博物館を考えつきました。最初はまず校内で展示しました。しかし校内での展示には校外の方が来にくいので、市役所やショッピングモールでの展示を始めました。その後、展示物だけでは伝わりにくいということで、実際に食べていただきたいと考え、試食会をして郷土料理のおいしさを伝える活動を始めました。自治会の集まりにお寺で試食会をしたり、高校生と郷土料理を作ったり、企業さんのご協力をいただいて試食会をしました。これが「行動化」です。

### 遠隔授業に実体験を取り入れる

こうした取り組みをする中で、パルビスさんと阿部先生が来校され、「郷土料理の学習だけではなく、それを生み出す農林水産業を学ぶことも重要だ」という話をいただいたことから、農業、水産業、林業の学習を始めることになりました。例えば林業では獣害について学び、coco 壱番屋さんにご協力いただいて鹿を食べてみました。このような多様な学習ができるのは、本校は滋賀県からエコスクールに認定されており、近隣の研究機関、企業、保護者と連携しながら話し合いをもち、進めているからです。

また、草津市は文科省から ICT の先進指定地域に選ばれていることから、県外各地を見せる取り組みもしてきました。同時に子供たちはラジオにも出演し、伝えることもしています。

遠隔教育で特に本校が大事にしていることは、できるだけ教師が現地に行くということです。現場に先生がいることで子供たちは安心しますし、授業を進める中で質問等の内容が逸れることなく、より効率のいい授業ができます。そして、必ず食べるという体験をいれるということです。例えば大分との遠隔授業では、事前に椎茸をおくっていただき、それを調理したものを遠隔授業の最中に食べます。

### 遠隔授業で学ぶことは、知識とストーリー

また、1つ1つの遠隔授業において、その地域のストーリーをきちんと子供たちに伝えることも大切にしています。例えば、子どもたちが大豆を栽培し、収穫したとき、枝豆の食べ方を考えました。滋賀県の農家の方にお聞きし、「茹でて食べるんや」と教わりました。しかし滋賀県とは違う食べ方をする地域があるということを知り、東北の「ずんだ」を学ぶことになりました。そして福島県の飯舘村から避難しておられるおばあちゃんたちにお話し、教えていただきました。このおばあちゃんたちは子供のころからずんだを作っ

てきたのだけれど、原発事故でふるさとに戻れなくなった。もう飯館村の大豆でずんだを作れない。そういうおばあちゃんたちから学ぶことを意識し、また遠隔授業の際は、事前におばあちゃんたちが作ってくれたずんだ餅を送ってくださり、それをいただきました。すると子供たちはそのおばあちゃんたちの郷土も大事に思うようになり、同時に滋賀の文化も大事にするようになります。このように、学習のなかではストーリーを大事にしています。一つ一つの遠隔授業にストーリーがあり、子供達はそれを大切に学んでいます。

### 子供たちが考え、取り組む

また、学習では子供から出てくるアイデアを大事にしています。学習を進めるうちに、子供たちは自分たちのことも相手に伝えたいと思うようになります。そこで子供たちは学習発表会として、全国 7 カ所と同時中継し、遠隔でシンポジウムを行いました。そのシンポジウムでは、子供たちが滋賀の農林水産業を未来に引き継ぐためにどうすればいいかを考え、「知る、考える、行動する」というサイクルが大事だという結論に至りました。自分たちの声として、しっかりまとめてくれています。自分たちが経験してきた学びそのものだと思います。自然豊かな地域での環境学習はさまざまなかたちで行われていると思います。しかし、都市化された地域でもこういう学習活動ができるのです。本校のような、地域ぐるみで子供たちを育てる取り組みは汎用性がある方法ではないかと考えています。

### コメント「GIAHS をグローバル教育に活かす」

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校 教諭 上水 陽一氏

まず中村先生のご発表についてのコメントですが、すごいなと思います。その中で、滋賀県全体へのこの学習の取り組みは広がっているのか、教員の仕事を越えてコーディネート役割も担われており、他地域と連携するためのネットワークはどうされているのかなど、この後さまざまにお聞きしたことがございます。

### 五ヶ瀬中等教育学校

ここでは本校の GIAHS を使った高校教育についてご紹介させていただきます。本校は五ヶ瀬町という山がちな地域にあり、平成 6 年に開設されました。実は、私はその 1 期生です。全県から生徒が集まり、全寮制で 1 クラス 40 名、6 学年 240 名の特殊な学校です。本校は「学びの森」と呼ばれ、「わらじづくり」を恒例にするようなローカルな学びも進めてきました。宮崎県の施策にフォレストピア構想(森林理想郷)というのがありまして、本校があります五ヶ瀬町はその構想において「学びの森ゾーン」という教育の拠点に指定されていたことにつながります。

## 「ローカルこそグローバル」を教育に

また、この地域が 2015 年に GIAHS に認定された際、FAO でのプレゼンには本校の生徒が参加しました。本校はローカルな学びを進めながらも、グローバルに認められた価値のある地域にあるという特徴があります。本校では昨年度までは SGH にも指定されておりました。なぜこんな山の中で SGH なのだとう質問を多くいただくのですが、「ローカルこそグローバル」であるとお答えしており、この考えのもとで教育を展開しております。今年度からは文科省から、「地域との協働による高等学校改革推進事業」において、「グローバル型」の指定もいただき、新たな教育を展開することになりました。この教育プログラムの根底には「地球市民を作りたい」という目的があります。GIAHS を基盤とした教育コンソーシアムを立ち上げ、世界農業遺産活性化協議会、近隣研究機関、自治体、NPO 等と連携し、また地球研の阿部先生にもアドバイザーとなっただき、世界に開かれた教育をしようとしています。地球市民となるための 5 つの力を設定しました。関連づける力、問う力、見る力、試みる力、繋がる力です。これらを備えた人材を育成するための教育の内容ですが、本校での 6 ヶ年の中で、1 年生から 3 年生までは高千穂郷椎葉山地域についてのローカルの学びを中心に、4 年生から 6 年生まではグローバルを中心に社会と共に何ができるかを考える教育を進めます。ローカル教育については、地域での自然体験を重視した勉強します。グローバル教育についてはさまざまな相手と英語での対話や問いを立てる課題に取り組みます。年間 708 時間、6 年間で 400 時間を使って進めています。具体的に GIAHS を学ぶ活動としては、自治体職員に支援員となっもらい、研修を受けたり、宮崎大学の留学生を受け入れ GIAHS に関するディスカッションを行っています。また海外で学んでいる日本人大学生をまねき二泊三日の地域ツアーを企画し、その中でディスカッションを行っています。さらにシンポジウムを開催しています。今年度は「高千穂郷・椎葉山地域の 18 番目の SDGs」をテーマとして、1 日かけてディスカッションをしました。ディスカッションの共通項としては、「つながり」、「地域のよさを受け継ぐ」、「地域のよさを地域が知ること」などがありました。来年度は留学生の受け入れも検討しています。海外の GIAHS を学んでいる高校生の受け入れです。その試みの 1 つとして、地球研につないでいただき 9 月には東ティモールの高校生を受けいれました。たった 1 日でしたが、生徒たちは涙ながらに別れました。非常に特徴的な取り組みでした。

## 地域とうまく関係しあう -三方よし

この教育活動は三方よしである必要があると思っています。学校のもっている専門性や探求性と、地域のもっている複雑性、多様性がうまく関係しあうことが大事だと思います。そのなかで生徒が共感し、汗をかくことが大事だと思っている。これは渋川小学校の取り組みとも共通するところであると思いますし、文科省が進めている世界に向けた教育活動のためには、GIAHS は非常によいテーマであると考えています。この 3 年間の教育活動の

最終年度は、もう一度生徒が FAO に行って、認定後の地域の価値を伝えに行きたいと思っています。

## フラッシュプレゼンテーション プレゼンで出された内容

### ◆世界農業遺産に関する仕事内容

- ・世界農業遺産に関するすべて
- ・世界農業遺産の認知度向上
- ・世界農業遺産の価値創造
- ・認定地における農産物のブランド化
- ・世界農業遺産に関する事業の進行管理
- ・世界農業遺産に関する事業の予算確保
- ・世界農業遺産ツーリズム
- ・実際の農業・農業の継承
- ・生物多様性調査
- ・教育
- ・人材育成
- ・世界農業遺産に関する調査・研究・学会事務局
- ・申請
- ・審査対応

### ◆仕事における課題や難しい点

- ・挙げるとキリがない
- ・認知度、意義等の理解度が上がらない（特定の要素・人物・地域に偏った遺産、という誤解）
- ・後継者不足
- ・生産物のブランド化・地域住民への“メリット”に対する不満
- ・農家民泊の掘り起こし
- ・認定地内の公共交通不足
- ・認定後の継続的な世界農業遺産関連の取り組み
- ・認定地において全地域的な活動とならない
- ・未来のビジョンにつながらない

- ・行政主体から地域主体への移行
- ・地域内でのさまざまな組織、団体との連携
- ・マニュアルがない
  - ・とにかく忙しい
- ・オーバーツーリズム

#### ◆フォーラムへの期待

- ・認定地の各機関、団体との上手なつながり方
  - ・地域住民の参画の方法
  - ・世界農業遺の保全と活用に関する事例を共有すること
  - ・他地域とのネットワーク構築
- ・若い世代に対する世界農業遺産への巻き込み方
  - ・申請に関する経験の共有
  - ・実務者の実体験、意見の共有
- ・情報交換
- ・心の炎を燃え上がらせたい
  - ・世界農業遺産の活用アイデア
- ・自身の取り組みに何が足りないか、何が足りているかを客観的に知りたい